

論壇

豪で高まる日本語人気

先日、オーストラリアのメルボルンで会議に出た折、日本領事館の依頼で地元の大学で日本について教えている方々と会食する機会があった。メルボルンの大学では最近日本語が高まってきたようで、大学でも日本語の講義をとる学生が急増しているようだ。結構なことだと思う。

その話をしてくれたメルボルン大学の先生の、日本での経験の話は印象的だった。彼が最初に日本で生活したのは、大分県姫島村だという。姫島と言われても知らない人も多いかもしれない。瀬戸内

伊藤 元重

学習院大教授(国際経済学)

海の西の端の方に位置する島で、大分県国東半島から6^{キロ}離れた海上にある東西7^{キロ}、南北4^{キロ}の離島だ。現在の人口は2千人程度であり、主な産業は漁業である。

彼は姫島に住むことになった最初の外国人だろう。日本のことをほとんど知らないオーストラリアの若者が、姫島で1年すごした。

JETプログラムの重要性

その後彼は、日本の地方都市の大学で7年ほど教鞭(きょうべん)をとり、現在はオーストラリアに戻って大学の先生をしている。姫島の経験は非常に新鮮だったようで、その後、ずっと日本と関わりのある仕事をしている。今や日本にとって非常に重要な役割を、メルボル

ンの大学で果たすようになっていく。

オーストラリアの若者が瀬戸内海の離島の姫島に来たきっかけは、日本政府のJETプログラムであった。JETとは、The Japan Exchange Program and Teaching Programの略で、直訳すれば日

それとの交換で村の学校で英語の補助教員をしてみよう。

外国の若者にとっては資金をもらって日本での生活を体験することができ、地元の子供たちは生の英語で学ぶ機会を持つことができる。姫島での生活はオーストラリアの若者にとって驚きだっただろうが、初めて自分たちの村に住む外国人を見た村の人たちにも新鮮な経験だっただろう。

日本と一生関わる人材

何よりも重要なことは、こうしたプログラムを通じて、日本と一生関わっていく多くの有為な人材を育成することになるということだ。このメルボルンでの昼食会には、現地の大学で日本語を教えている日本人の先生も参加された

が、この人の奥さんはアメリカ出身でやはりJETプログラムで宮城県の小さな村に来たそうだ。

米国やオーストラリアで、かつてJETプログラムに参加した経験のある人とお会いすることは少なくない。大学の先生だけでなく、ビジネススマンやジャーナリストなど、いろいろな職種の人がいる。日本と関わった仕事をする人が多く、皆さんの多くが日本びいきである。

人材交流は国際化を進めていく上でもっとも重要なことだ。それも、短期の交流だけでなく、JETプログラムのような形で長期的に日本に関わる人材を育成していくことも大切だ。今後このプログラムでより多くの外国の若者に日本に来てほしいものだ。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。